

出典：藤原定家『毎月抄』の一節 / 東京学芸大学 教育学部 91年

現代語訳

A また、昔の和歌や今の和歌にも、本当に(着想を)充分に表現しきれていないように見受けられることがあります。そのように思える(という)ことは、いかにも未熟なうちなのにちがいない。(また)熟達した人がわざとここまで(で止めておこう)と詞を言いかけにしておく歌があります。(詞を)はつきりとさせずにおぼろげにして(歌を)詠むことは、これは既に熟達した人の技巧なのにちがいません。それを羨ましいと思つて、(充分に)学ぶこともできないのに未熟な人が詠むのは、何とも言えず見苦しい(と思われる)ことでもあります。

B そもそも、和歌で納得できないのは(掛詞や縁語などの)修辭技巧であります。修辭技巧も自然に何となく詠み出されてきたのはそのままであつてよい。(しかしながら)どのようにしようかとあれこれ工夫を凝らして詠んだ修辭技巧は、とても見苦しく、また興ざめしてしまうことにちがいません。

C また、本歌取りをします時は、(本歌が主題としている)花の歌をそのまま花(の歌)として詠み、月の歌をそのまま月(の歌)にして詠むということは、名人の技巧であろう。(普通の人は)春の(本)歌を秋・冬に詠み換えて、恋の(本)歌を雑や季の歌に(詠み換え)て、しかもその(本)歌を取つたのだということがわかるように詠み直すのが望ましいのです。本歌の詞をあまりに多く取ることはあつてはならないこととございます。その(本歌取りの)やり方は、(歌の)中心と思われる詞を二つぐらい(取ること)にして、今回に(詠む)歌の上の句と下の句に分けておくのが適切ではないだろうか。たとえば、「夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて(「夕暮れになると、雲の端の方に向かって何となく物思いに沈んでしまう。遠く天空にいる人のことが恋しくて)」とあります歌を(本歌として)取るならば、「雲のはたて」と「物思ふ」という詞を取つて上の句と下の句に置いて、恋の歌ではなくて雑・季(の歌)にして詠むのがよい。この頃も、この(「夕暮れは……」の)歌を取るといって、(この二つの詞に加えて「夕暮」の詞をも取り添えて詠んでいる(ような歌の)類も)類も)ございます。「夕暮は」と(いうぐらい)は取り添えていても、どうしてであるるか、悪くは思われぬ。目新しく、(本歌の)中心と思われる詞をそれほどまでに(たくさん)取るのはよくないことです。

また、あまり目立たないように取ってその（本）歌で詠んだともわからないというのは、どこに歌の中心があるのかわからないという事になってしまいますので、よろしくこれら（の本歌取りの作法）は心得て本歌を取るのが望ましいでしょう。

解答

問1 (1) 〓 和歌の技巧の未熟な人〔解答例〕

(2) 〓 はた目に見苦しいと思われること〔解答例〕

問2 和歌で難しいのは修辞技巧であり、自然に何となく詠み込まれたものはまだいいが、工夫を凝らして詠んだのは見苦しいものである。〔60字・解答例〕

問3 已達の手柄〔5字・3行目〕

問4 その歌にてよめるよとも見えざらむ〔16字・16行目〕

問5 本歌の主題を示す語ではなく、取り添えた程度に過ぎないから。〔29字・解答例〕

問6 (1) 〓 本歌が恋の歌であるのをそのまま恋の歌に詠み換えるのは、本来の作法には合わないが、作者が熟達者だから、差し支えない。

(2) 〓 本歌からその眼目となる「雲のはたて」、「物思ふ」の二語を引用したのは、それで本歌が想起できるから、適切である。

(3) 〓 本歌から取った詞のうち「雲のはたて」を下の句に、「物思ふ」を上句に振り分けて配置したのは、適切である。

(4) 〓 本歌から「夕暮」の詞も引用したのは数の上では多いが、これは本歌の中心ではないものを添えた程度なので、差し支えない。

〔いずれも解答例〕

現代語訳

(歌を詠むに当たっては) 言葉は〔三代集〕すなわち『古今』・『後撰』・『拾遺』に実績のある) 古い言葉を慕い、詩情は(時代に応じた) 新しい詩情を求め、自分の才能を越えた優れた高い歌格を願って、(勅撰和歌集の成立するより古い) 寛平年間以前を手本にするならば、自然とよい歌もどうしてできないことがございましょうか(、必ずできません)。昔の(優れた歌の姿) を慕い願うことから、昔の歌の言葉を(浅はかな考えで) 改めないで、それをそのまま土台として詠むのを、とりもなおさず「本歌とする」と申すのです。

その土台となる歌について考えると、具体的には、五七五(という上の句)の七五の言葉をそのまま用い、(別の歌からの文句であっても下の句の) 七七の言葉を古歌と同じに続けてしまうと、新しい歌とは(聞こうとしても) 聞きとることができないことがございませ(からそのまま用いてはなりません)。

(これに対して、) 五七(すなわち初句・第二句)の言葉は、その有り様によって(は、古歌のままの言葉を) 用いないのがよい(と判断する必要がある) のではございませんでしょうか。具体的には、「石の上古き都」「郭公鳴くや皐月」「久方の天の香具山」「玉銚の道行き人」などと申す言葉は、(伝統的な枕詞などだから) 何度もこの句を(用いて) 詠まないのでは歌ができるはずがない。(一方) 「年の内に春は来にけり」「袖浸ちて掬びし水」「月やあらぬ春や昔の」「桜散る木の下風」などは、(その時代にこの表現を新しく作つた人の創意だからそのまま新しい歌に) 詠んではいけないと(父である俊成が私に) 教えました。

次に、同時代に(歌壇で) 一緒に歌を詠んでいる仲間(の創意による表現) は、たとえすでに亡き人の場合でも、昨日今日というほど(のつい最近に) 詠まれた歌(の文句) は、(たとえ) 一句でも(この句は) あの人が詠んであったのだとわかるような言葉は、何としても(詠まずに) 避けたいと存ずるのでございます。

解答

問1 いその神 ・ ひさかたの ・ たまほこの

問2 歌を詠む際に昔の歌の言葉を改めないで、それをそのまま土台として詠むこと。〔36字・解答例〕

問3 場合によっては古歌のままの詞を用いない方がよいのではないのでしょうか

問4 傍線部Cに使われている枕詞は多くの歌の中に使われていて特定の心情と結びついていないのに対し、傍線部Dは古歌特有の心情を引きずっていて斬新な心情を込めにくいから。〔80字・解答例〕

問5 本歌の詠み人の心情が、自分の歌の内容に影響を与えるから。〔28字・解答例〕

解説

問1 純粹な知識問題。主要な枕詞は、どんな言葉に結びつくかを含めて、憶えておいたほうがよい。ここに出てきた三つの枕詞については、各自調べてみよう。

なお、「孰公」にも枕詞としての用法があることはあるのだが、これは孰公自体を歌に詠み込まずに「飛び」を導くときのことである。ここでは「鳴く」と孰公そのものを詠んでおり、また入試問題に必要な知識ともいえないから、これについては憶えることはあるまい。

問2 「本歌とす」とは、いわゆる《本歌取り》のことで、古歌の一節を自分の歌の中に詠み込んで重層的な世界を作り出す技法である。しかしここでは一般的な知識を問うているわけではない。傍線部Aの直前の「即ち」という言葉に着目すれば、「古きをこひねがふにくたるを」の内容を解答にすればよいことがわかる。従って、解答例のようになる。

問3 現代語訳問題。「様によりて」は「有り様によって」、「去る」はこの傍線部の解釈の眼目とも言うべき部分で、「(その場を)離れる」の意味から「捨てる・用いない」などと訳せる言葉で、後述するとおりこの場合もその意味になる。またこの文章は、定家が歌詠みに語りかけるものだから、「去る」の主体は「あなたたち歌詠み」ということになるので、助動詞「べき」は《適当・勧め

誘（くするのがよい）意で解釈する。「に」は《断定》の助動詞、「侍ら」は《丁寧》の補助動詞。「やくむ」という疑問の係り結びがある。これらをまとめて解答を得る。

ただし、ここにはちよっとした盲点がある。「く」にやあらむ」は単語単位で対応させた逐語訳では「くデアロウカ」となるが、これは現代語では「くデアナイタロウカ（私ハソウ思ウ）」と、文中にない打消語を補って初めて表現意図を満たすことが多いのである。

さてこの文章は、冒頭の主張から、基本的には「古歌の表現を尊重すること」を述べたものである。したがって、「去るべきにや侍らむ」を「離れるほうがよいのではないだろうか、私は離れる方がよいと思う」と解釈してしまうと、冒頭の主張と整合性がなくなるのである。また、以降の文脈では、古歌の初句・第二句を接続したままで使うことについて、使わざるを得ない場合と、使ってはならない場合とを、併記している。ここで全文の趣旨の流れを汲んでみよう。初めに「古歌の表現を下敷きにしつつ新しい詩情を求めよ」とし、「（初句を除いた）七五七七を古歌の表現で埋め尽くすな」を経て、「枕詞は仕方がないがそのまま使ってはならない古歌の表現もある」と断った上で、「同世代の歌人の詠んだ言葉は決して用いない」となる。つまり「伝統的な表現は尊重するが、時代に応じた心情は表現の独自性が重要」という流れが見えるはずだ。

そこで初めて見た「様によりて」が効いてくる。すなわち「基本的には古歌の表現を土台にするとはいえ）表現のあり方によっては使わないほうがよいこともある（のではないだろうか）」と言いたいことになるのである。これらをまとめたのが解答例である。

問4 波線部の意味は、問3でも見たように、「古い言葉（＝古歌の中の言葉）を使いながら、歌に斬新な心情を込める」ということ

と読める。これを前提とすると、傍線Cがよくて、傍線Dがよくないのは、前者が斬新な心情を込めることを可能にし、後者の場合はそれが不可能になるからだと考えられる。それでは、なぜそうなるかということを考えながら傍線Cと傍線Dを比較すると、傍線Cは枕詞のような決まりきった言葉が使用されているのに対し、傍線Dはそうなっていない。ところが、決まりきった言葉の方が新しい心情に結びつき、独自の表現が新しい心情に結びつかないのは、一見矛盾するようにも思われるだろう。そこが出題者の狙い目である。

ここで考えるべきなのは、Dもすでに当時「古歌」と見なされる表現になってはいるが、ここには枕詞のような約束事が詠み込まれているわけではなく、その歌の作者の独特の表現だという点である。Dよりあとで、筆者は「同世代人の独自の表現を使わな

い」ということを述べているが、これが全文の主張「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」を踏まえたものであるはずだから、「作り主の解っている他人の独自の表現を借りると、自分の独自の心情は表現できない」といった考え方で解釈するしかない。これをひっくり返せば、「決まりきった言葉は特定の心情に結びつかないほど客観化されているから、新しい心情を込める邪魔にはならない」ということにもなる。これをまとめてやればよい。

問5

これも、「古い言葉を使いながらも、古歌の心情に影響を受けてはならない」という、この文章全体の趣旨から考えること。最近の歌を本歌として本歌取りをすると、その本歌に対する一般の印象がまだ強いから、本歌に固有の心情が邪魔をして自分の歌にこめようとする新しい心情が表現できなくなる可能性が高くなる。だからいけないというのである。

定家の時代すなわち鎌倉時代の前期は、まだ「古今伝授」などといったがちがちのマニエリスムの時代ではない。とはいっても、一般的な古人の芸術観としては、「まず伝統を重んずることが優先され、その上で独自性の発露もあるべきだ」という考え方のあったことを理解しておくことが重要である。現代人の常識からすると、「芸術作品は独自性を命としている」ということが唯一の重大事のように思われがちだが、そういった短絡的な思考から自分の意見で答案をでっちあげるのでなく、問題文が「歌論書」であることに十分に鑑みて、現に表現されている文章から筆者の趣旨を汲み取る姿勢が重要である。